

モンキー, 234: 10.

- 6) 相見 満 (1990): 学名の話(5)先取権について. モンキー, 235: 8-10.
- 7) 相見 満 (1991): なぜサルは北アメリカにいないのか. ワイドV: 生物の分布 (小野勇一・大島康行監修), pp. 18-19, 学研.
- 8) 相見 満 (1991): 樹冠にくらすサルは地上にはおらないのか. ワイドV: 生物の分布 (小野勇一・大島康行監修), pp. 70-71, 学研.

学会発表

- 1) Nakakuki, S. and Ehara, A. (1990): The bronchial tree, lobular division and blood vessels of the orang-utan lung, XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 25.
- 2) Suzuki, K., Miyake, K., Hayama, S. and Ehara, A. (1990): Comparative study of the gastric mucosa in primates. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., p. 100.
- 3) Sakaguchi, E., Suzuki, K., Kotera, S. and Ehara, A. (1990): Fibre digestion and digesta retention time in macaque and colobus monkeys. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 114.
- 4) Aimi, M. and Nogami, Y. (1990): Dental incremental markings in enamel of Japanese macaques. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 22.
- 5) Aimi, M. (1990): Morphology and distribution of Sumatran leaf monkeys. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 140.
- 6) Hartwig, W. C., Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1990): The emergence of modern platyrrhine genera. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 35.
- 7) Setoguchi, T., Takai, M. and Shigehara, N. (1990): A few Miocene primates from Colombia, South America and its implication for the phylogeny of platyrrhines. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., p. 36.
- 8) Takai, M. and Setoguchi, T. (1990) On the *Neosaimiri* - *Saimiri* complex; the status and the validity of the genus *Neosaimiri*.

XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 36.

- 9) Kobayashi, S. (1990): An analysis of interspecific relationship of the genus *Callicebus* based on cranial measurements. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 83.

ニホンザル野外観察施設

加納隆至 (施設長・兼)・東 滋・
渡邊邦夫・足沢貞成¹⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、和田一雄・鈴木 晃によって進められた。平成2年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の蓄積された資料のもとに、野外観察施設の中では独自の位置を占めている。ところが近年、宮崎日南海岸がリゾート法の地域指定を受けたことを契機に、幸島近辺でもいろいろな観光開発の動きが出てきている。特に昨年の冬頃から、一部の渡船業者が幸島のサルに餌を与え、ひどいときには海中に餌を撒いて、サルに水泳をさせるということをするようになった。各方面からの協力を得て、夏には何とかやめさせることができたが、幸島対岸に舟溜りができたこともあって、観光客の数ははるかに多くなっている。関係各官庁とも連絡をとり、今後の対策を検討中である。また串間市内の一部有志を中心に、宮崎県と串間市の協力を仰いで、幸島自然保護センターをつくらうという動きも出てきている。今後、注意深い対応が必要になろう。

今年(平成2年)も春から夏にかけて、島が堆積した砂によって地続きになり、サル番を出す日が多かった。秋に台風がきてこの状態は解消されたが、舟溜りをつくったために幸島との間の突堤が以前より高くなっており、完全には堆積した砂を流しきれないようである。従って日中に潮の低くなってきた平成3年3月の時点では、すでにかなり水深の浅いところできており、平成3年度にもやはりサル番が必要となろう。平成元年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を含

1) 教務補佐員

め103頭であり、この10余年の間ほとんど変化していない。平成2年度の出産は9頭であり、うち2頭が死亡した。

その他、小学校の教科書に幸島のサルが取り上げられていることもあって、学校関係からの問い合わせが、このところ非常に増えている。それに対応するために、幸島の概略を紹介するパンフレットを作成する作業が進められた。

2. 下北研究林

下北西北域に棲息するニホンザルの群れは研究林発足当時はI, M, Zの3群とみられていた。

その後、各群とも個体数が増え、それぞれいくつかの群れに分裂した。各群がそれぞれ、いくつかの群れに分裂したのかを明らかにするのが当面の調査目的となった。

平成元年度と同じく平成2年度も12月～1月と3月にその調査が行なわれた。結果は、I群では従来の生息域が大幅に拡大した中に5集団が認められ、Z群では生息域を大幅に拡大した中に3～4集団が認められた。M群では2集団があった。

下北西北域のニホンザルの地域社会は大幅に変わりつつあることが明らかになった。

3. 上信越研究林

横湯川流域において、Seed Trapに入る果実量の測定と樹種毎の樹高・胸高直径分布から果実生産量を推定する作業を、10年間にわたって行っている(和田一雄、小見山章(岐大))。

雑魚川流域の調査も続行されたが、本年度は群れの所在を発見することができなかった。ここ10年の環境変化のもとで行動域に大きな変化がおこった可能性がある。

また、熊成培(国費招へい研究員)によってチベットモンキーとの比較研究がおこなわれた。

4. 木曽研究林

この研究林が人里と接する地域では、近年有害鳥獣駆除としてのサル捕獲が続く、そのための対策をたてることが急務となっている。しかし、人手不足もあってなかなか有効な手だてが打ち出せない状態である。より広域をカバーする地域個体群全体としての現状調査を行なう必要があり、そのための方策が検討されている。

5. 屋久島研究林

共同利用研究で、鈴木 滋が、「ニホンザルの野生群におけるオスの社会的発達」、揚妻直樹が、「森林内の食物の分布とニホンザルの移動採食様

式」、野間直彦が、「屋久島の照葉樹林における果実とニホンザルとの関係」についての研究を行った。

4月25日、屋久島国際シンポジウム「総合的猿害対策への提言」が、上屋久町、屋久町、本施設の3者共催によって開かれ、26日、IUCN/SSC 霊長類専門家グループの屋久島ワークショップを開いた。参加者は、A. Richard 教授(エール大学)、D. Hill 博士、D. Sprague 博士、黒田末寿、山極寿一、丸橋珠樹、好広真一、古市剛史、竹門直比、東 滋の各氏であった。

8月1日～10日、ヤクザル分布調査グループによる一斉調査の第2年次として、定点法の精度検定のための調査を、国割岳西斜面、カンノン崎～瀬切間で行なった。参加者40名。

8月5日～9日、霊長研M1学生4名を対象に野外調査実習を屋久島研究林においておこなった(担当 山極寿一、丸橋珠樹(武蔵大))。

県道永田～栗生線の改良拡幅工事にともなうモニタリングの調査(第4年次)を、ヤクシマザル(東滋ほか)、ヤクシカ(林勝治(宇部短大))、コイタチ(東 英生ほか(WMO))について行なった。この調査(代表:大塚閨一(鹿大・農・教授、鹿児島県自然愛護協会)は他に地形・地質(未定)、植物(田川日出夫(鹿大))、森林(吉田茂二郎(鹿大))の各班がある。国割岳西斜面をはしる通称「西部林道」の今後の計画を方向づける基礎調査としての社会的役割をもつ。

屋久島研究林地域とほぼ重なる国立公園第1種特別地域の保全に重大な影響をもつ同道路計画について、その環境影響予測の科学的基礎ともなる性質のものである。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡邊邦夫・山口直嗣²⁾・冠地富士男²⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析をすすめている。

2) スラウェシマカクの種分化及び社会生態に関する研究

邊辺邦夫

2) 文部技官

インドネシアのスラウェシ島において、島内に生息する7種マカクについて、外形特徴の種内変異、その成長に伴う変化、種間雑種の有無などについての調査を行なった。またムーアモンキーの個体識別に基づく個体関係の分析を続けている。

3) 全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

邊辺邦夫

ニホンザルの個体数や歴史的変遷を、具体的な調査報告類から再構成し、さらに系統だった資料として後世に伝えて行くために、こうしたニホンザル個体群に関する調査報告類をデータベース化する作業が進められた。

4) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

5) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM, I, Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

6) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係、個体群構造、資源利用などに関して比較社会生態学研究を行い community 構造のなりたちを考える。

論 文

- 1) Watanabe, K., Lapasere, H. and Tantu, R. (1991): External characteristics and associated developmental changes in two species of Sulawesi macaques, *Macaca tonkeana* and *M. hecki*, with special reference to hybrids and the borderland between the species. *Primates*, 32 (1): 61-76.

報告・その他

- 1) 渡辺邦夫 (1990) : ニホンザルの繁殖—幸島

群の例から。財団法人日本モンキーセンター年報, 平成元年度:82-86.

- 2) 渡辺邦夫・三戸幸久・和田一雄・東 滋:
(1990): 誤ったニホンザル分布論—羽柴論文に対するコメント. *霊長類研究*, 6: 30-35.
- 3) 渡辺邦夫 (1990): リゾート開発と天然記念物. *モンキー*, 234: 3.
- 4) 東 滋 (1991): 国割岳西斜面のヤクザル個体群の地域構造. 1990年度西部林道モニタリング調査サル班報告.

学会発表

- 1) Watanabe, K. and Mori, A. (1990): Prolonged effects of developmental retardation on the prospective reproduction concerning to food-shortage observed in Japanese macaques on Koshima Island. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 49.
- 2) Watanabe, K., Takenaka, O., Iwamoto, M., Kawamoto, Y., Watanabe, T., Hamada, Y., Suryobroto, B., and Brotoisworo, E. (1990): Synthetic analysis on origin and speciation of Sulawesi macaques. XIIIth Congr. Int. Primatol. Soc., Abstracts, p. 137.
- 3) Azuma, S., and Mori, O. (1990): Hazard of Gene Pollution in Shimokita Japanese Monkey. -- Management Problems concerning hybridization with introduced Formosan monkeys. Vth Int. Congr. Ecol., Pre-Symposium.
- 4) Azuma, S. (1990): Long-termed trend of Japanese monkey population in a warm temperate forest. Vth Int. Congr. Ecol., Abstracts, p. 340

サル類保健飼育管理施設

小嶋祥三 (施設長・兼)・松林清明・
後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

平成2年度のサル施設の活動を以下に述べる。

- 1) 教務職員